

C'n

SCENE
NEWS

CHIBA CITY MUSEUM OF ART



タシエス「まいごの幼子」© Tassies

Topics

ブラティスラヴァ世界絵本原画展とチェコの人形劇
千葉アートネットワーク・プロジェクト2010

開館15周年を迎えて

千葉市美術館は、平成7年（1995）11月3日に開館して以来、この11月で満15年を迎えることになりました。開館15周年記念特別展の第一弾として開催した「田中一村 新たなる全貌」展は、おかげさまで大きな反響を呼び、市内はもとより全国から大勢の方に来館していただきました。第二弾は、現在行っている「世界の絵本がやってきた プラティスラヴァ世界絵本原画展とチェコの人形劇」展、さらに年末から年始にかけては「帰ってきた江戸絵画 ニューオーリンズ ギッターコレクション展」と、充実した内容の特別展が目白押しにラインアップされています。満15年といえば、人が誕生して中学を卒業するまでの期間、少年少女期を終えて青年期へと入ろうとする時期に相当します。これからはなおいっそうの成長をと、周囲の見る目も厳しくなろうかと覚悟しております。館員一同、さらなる前進をすべく心を新たにしているところです。

本館のコレクションは、①「房総ゆかりの作家・作品」、②「版画を中心とした近世・近代の日本絵画」、③「現代美術」と、3本の柱から成っています。①は先頃「わが心の千葉」と題してその代表作をご披露した郷土画家、無縁寺心澄をはじめとして、千葉市や房総半島に生まれ、育ち、あるいは来訪した美術家たちの作品、②の中心となる江戸時代から近代にかけての浮世絵やそれに続く版画・版本の総体は、その領域でも屈指の有名なコレクションとなっています。③は草間弥生をはじめ日本を代表する現代アーティストの活動に早くから注目して独自の収集を進め、今日では国際的にメジャーな展覧会からもしばしば出品依頼が来るほどになっています。開館以前とその直後の時期に、千葉市の積極的な支援を受けて収集に努めた初代館長辻惟雄氏と館員諸君の慧眼と奮闘に、2代目の館長として個人的に、改めて敬意を表したいと思います。

毎年、年間に5、6回行ってきた特別展は、美術館の花といっって良いでしょう。大英博物館と共催の開館記念「喜多川歌麿展」ではじまった足取りは、その成果物であるカタログで確かめられますが、当館1階の情報コーナーには、折々のリーフレットが壁面いっぱいに飾られており、圧巻です。皆様から募集した「もう一度見たい思い出の展覧会」のアンケート結果も公表されていますので、ご来館の折に覗いていただければ幸いです。

しかしながら、美術館の実力は、やはり所蔵品展で計られるのが本筋というものでしょう。特別展の陰に隠れがちですが、所蔵品や寄託品によるテーマ展は、一般が200円の観覧料でご覧いただけます。質量ともに充実した内容に、受付で「こんなにお安くてよろしいのですか」と聞き直してくださる方も多しとか。最近、千葉市にお住まいの方ばかりでなく、千葉県内や県外の方々から、大切な美術品の寄贈や寄託を申し出ていただけるようになりました。さらにはまた、ギャラリートークや美術館への道案内をかって下さっているボランティアの方々をはじめ、多くの方々に支えられて、千葉市美術館は健全で活力に富んだ活動を続けることができいております。今後とも相変わりがませずご支援、ご指導のほどを心よりお願い申し上げます。

（館長 小林 忠）



大好評だった「田中一村 新たなる全貌」【2010年8月21日(土)-9月26日(日)】 展示室



「田中一村 新たなる全貌」と同時開催「わが心の千葉」 展示室



「千葉市美術館開館記念展 喜多川歌麿展」
【1996年11月3日(金)-12月10日(日)】開催時の千葉市美術館入口



「MASKS-仮の面-」【2010年7月6日(火)-8月15日(日)】
美術館ボランティアによるギャラリートーク



「開館15周年記念関連展示 千葉市美術館のあゆみ」
【2010年8月21日(土)-9月26日(日)】 展示室

開館15周年記念 | 世界の絵本がやってきた

ブラティスラヴァ 世界絵本原画展と チェコの人形劇

XXII. Bienále ilustrácií Bratislava Slovensko



図1 タシエス「まいごの幼子」©Tässies



図2 ヤナ・キセロヴァー・シチェコヴァー
「天使よ、私の守護天使よ」©Anjelíčku, můj strážníčku

BIB2009の受賞作家たちと展覧会のみどころ

日本でも絵本原画の展覧会は幅広い層からの人気を集めており、書店内にコーナーを設けてのささやかな紹介から、毎年恒例となっている美術館での大規模な展覧会まで様々な催しがあります。そのような中、当館で紹介するのは3回目となる「ブラティスラヴァ世界絵本原画展（略称BIB）」は、スロヴァキア共和国の首都ブラティスラヴァで開催される世界最大規模の絵本原画展として、子どもの本を通じた国際交流に大きな役割を果たしてきました。

世界各国から到着した原画作品を対象として、市中心部の会場で開かれる原画展（10月下旬まで開催）に先立ち8月末から9月初めにかけて国際審査が行われ、グランプリ、金のりんご賞、金牌の他、出版奨励賞などが選ばれます。2009年秋の第22回展の場合、37カ国344作家（448タイトル）による合計2,437点の原画が並んだブラティスラヴァの会場は、審査終了後、約1ヶ月半のあいだ一般公開され、学校からグループで訪れる子どもたちや家族連れから、イラストレーターを志す若者たち、世界中の絵本・出版関係者たちまで、多くの人々が足を運びます。原画展の会場だけでなく、街のあちこちでイラストレーション関係の展覧会やイベントが開催され、ブラティスラヴァの小さな街全体が、2年に一度のお祭りで賑わうこととなります。

会場では、前回のグランプリ受賞者の特集展示が行われるのも恒例となっており、趣向を凝らした展示が楽しみにされています。2007年秋にグランプリを受賞したドイツ人イラストレーターのアイナール・トゥルコウスキは、今回、国際審査員もつとめました。一昨年当館でもご覧いただいた、鉛筆だけで描かれた繊細かつユーモアのある作品「まっくら、奇妙にしずか」を覚えていらっしゃる方もいるのではないのでしょうか。

BIB2009のグランプリはスペインのタシエスによる「まいごの幼子」でした【図1】。原画ではいっそう物語のテーマにふさわしい表現の重みを感じられます。木版画のような力強さはガッシュによるものであり、色数は押さえられ、強いコントラストを支える黒い輪郭線が勝っています。また、会場でいくつかのページを連続してご覧いただくか、実際に絵本のページを繰っていただくともわかりますが、ページのつながりがとてもうまくできていて、物語が展開してゆくスピード感を感じさせます。開催国スロヴァキアの作家2人の仕事も、じっくりご覧いただきたいと思います。スロヴァキアといえば、アルビーン・ブルノウスキー（BIBで若手作家たちのために開催されるワークショップは彼の名前を冠しています）やドゥシャン・カーライの想像力豊かで細部にせまる繊細な描写が思い出されますが、金牌を受賞したヤナ・シチェコヴァーの原画作品に目を向けてみれば、布目に重ねられた淡い色彩の効果を発見することができます【図2】。また、マルチナ・マトロヴィチョヴァーがアメリカの小説家ウィリアム・サローヤンの中編『トレシーの虎』（1951年）のために描いた作品は、原作の魅力を新たな角度から引き出すものといえるでしょう【図3】。

子どものための本と一括りにしてしまうには、あまりに豪華で繊細な、民話や伝説を題材としたベラルーシのパーヴェル・タターニコフとロシアのボリス・ザビローヒンの作品



図3 マルチナ・マトロヴィチョヴァー
「トレシーの虎」©Martina Matlovičová



図4 パーヴェル・タターニコフ
《アーサー王物語》©Pavel Tatarnikov



図5 ボリス・ザビローヒン
《ロシアの昔話集》©Boris Zabiorkhin

は、原画ならではの楽しみを与えてくれます【図4.5】。ザビローヒンのリトグラフは、分厚い本の所々にちりばめられた小さな挿絵が、ここでは一つの額に収められ、細部まで存分に味わうことができるのです。

これとは対照的なのが、フランスから参加したアンヌ・ベルティエのデザイン化された画面ではないでしょうか。この作品については、ぜひ会場で絵本を片手に比較しながらご覧いただきたいと思います。コンペティションに参加する作家は、1人2タイトルまで原画を提出できますが、後ほど紹介するチェコの作家フランチシェク・スカーラやイタリアのファビアン・ネグリンのそれぞれ2つの作品は、同じ作家が手がけたものとは思えないほど技法も表現も異なります。また、日本人で金牌を受賞した智内兄介「ぼくがうまれた音」の原画は、おどろくべきスケールで展示室の壁面を飾ります【図6】。

日本画と洋画の境界を越える独特の技法による、妖しく華やかな智内作品の世界観がここでも存分に展開されま

す。受賞作品の中でも、絵本を手にとった人がぜひ原画を見てみたいと思うに違いない作品の一つといえるでしょう。

普段なかなか手に取る機会のない原書との出会いも、原画展の楽しみの一つではないでしょうか。一口に絵本といっても、判型や紙の手触りなどは様々で、なかには、私たちの「絵本」のイメージを覆すものも少なくありません「世界の絵本がやってきた」というコーナーでは、BIB2009参加国より1冊ずつ、その国の絵本を展示します。

歴史をさかのぼると、初回のBIBが開かれたのは、スロヴァキアがまだチェコとともにチェコスロヴァキア社会主義共和国連邦を形成していた頃のことでした。チェコの文化については、近年ブームとも言えるものがあります。児童書やアニメーションに加えて、かわいらしい雑貨が若い女性の心をくすぐるのかもしれませんが。美術に関心のある方であれば、真っ先にミュシャのポスターを思い浮かべるかもしれませんし、文学では、『変身』のフランツ・カフカ(1883-1924)、『ダーシェンカ』のカレル・チャペック(1890-1938)、近年では『存在の耐えられない軽さ』のミラン・クンデラ(1929-)などが挙げられるでしょうか。また、スメタナ(1824-1884)の交響詩「わが祖国」やドヴォルザークの楽曲は私たちに親しみのあるものといえるでしょう。



図6 智内兄助《ぼくがうまれた音》今治城蔵 ©智内兄助

当館での開催にあたって、ポスター・チラシの表を飾るのは、金のりんご賞を受賞したチェコのフランチシェク・スカーラです。たいへんユニークな作家で、その活動はイラストレーションの世界にとどまらず、彫刻や音楽など幅広く、1993年には、第45回ベネチア・ビエンナーレにチェコ代表として参加しています。「カエルの城」は、『ソフィーの世界』(1991年)で知られるノルウェーの作家ヨースタイン・ゴルデルのファンタジー

小説の挿絵です【図7】。また、スカーラは「カエルの城」とともに『ツイレクとリーダの冒険』という絵本でエントリーしています【図8】。人形たちを屋外にセッティングして撮影した写真によって構成される画面は、マンガのようにコマ割りされ、それぞれ吹き出しがつけられており、スカーラ自身の別荘の近くで一年半をかけて撮影したものとされています。アニメーション(コマ撮りにより動きがあるもの)ではないものの、トゥルンカをはじめとするチェコのパペット(人形)・アニメーションがすぐに思い浮かぶのではないのでしょうか。スカーラ自身が一つの技法にとらわれず様々な分野で活躍しているということもありますが、この作品の背景にあるチェコの文化に目を向けるきっかけになればと思います。

展覧会の後半では、チェコの家庭用人形劇の世界をご覧ください。チェコの大人たちが人形劇や絵本によって子どもたちと共有してきた豊かな時間を、少しでも感じていただければと思います。



図7 フランチシェク・スカーラ
《カエルの城》©František Skála



図8 フランチシェク・スカーラ
《ツイレクとリーダのぼうけん》
©František Skála

[特別寄稿]

チェコの〈有名人〉カシュパーレックについて

美しい中欧の町並みを残すプラハ。カレル橋の両端に広がる観光客用の土産物店には、色とりどりの衣装をまとった操り人形が所狭しと吊られ「人形劇の国＝チェコ」を宣伝している。チェコとスロヴァキアは旧チェコスロヴァキア共和国を遡り、ハプスブルグ帝国の時代から人形劇が盛んな土地である。今回の展覧会では隔年毎にブラティスラヴァで開催される世界絵本原画展の受賞作品にあわせて、豊かな絵本文化を育む土壌となった操り人形の世界を紹介する試みである。できればこの機会にチェコの操り人形について初期から現代まで体系立ててその全貌を展示したいところだが、本展覧会では絵本と同様に家庭で語り伝えられる文化という視点から、19世紀以降の一般の家庭で楽しまれた操り人形とその劇場に焦点をあてた。そしてこれらの貴重なコレクションの貸し出しに応じてくれたのが、チェコ共和国にある「フルジム人形劇博物館」である。

ボヘミア東部にあるフルジム(CHRUDIM)は地図上でプラハの右斜め下に位置する町で、プラハの中心地から車で約2時間半、電車だとプラハ中央駅から東に位置するパルドゥビツェを経由して約2-3時間で移動できる。町の成り立ちは13世紀後半まで遡り、中心地に近いルネッサンス様式の建物の中に1972年以来「フルジム人形劇博物館」が設置されている。世界中の人形劇愛好家に知られるこの博物館は、UNIMA(国際人形劇連盟)の事務局長を務めたヤン・マリーク博士のコレクションを礎にして、世界中から集められた8300体以上の操り人形やそれらに関する資料、18000冊を超える蔵書が保管され、同時にチェコの伝統的な操り人形の膨大なコレクションが所蔵されている。

歴史的建造物を利用しているため各階の天井高は低く床面積も小ぶりだが、それゆえに人形劇の中に入ったような距離で展示に接する事ができる。地上階を含めて4フロアを展示に使用し、上に伸びた細長い建物を順次上がりながら人形劇の流れが追う構成になってい

様々な「カシュパーレック」



20世紀前半

20世紀初頭



1930年代-60年代

1950年代-60年代



デザイン：ルボル・シュヴォルチーク
20世紀後半

る。ここがプラハからもっと近ければ、さぞ多くの日本人観光客が訪れるに違いないのだが、その一方で魅力溢れる人形達と静かな空間で対峙できる豊かな時間もまた捨てがたい。

では今回の出品作品の中から、チェコを代表する有名人を紹介しよう。まずは図版1～3を見て頂きたい。お世辞にも愛らしいとは言いがたい成人男性から少年まで容貌は様々だが、これらはみな「カシュパーレック(Kašpáreks)」と呼ばれ、それぞれに鈴が付いた赤い帽子と衣装を身につけている。カシュパーレックはチェコの人形劇に登場するキャラクターで、その起源はまだ完全には明らかになっていない。チェコ人形劇の礎となった人形遣いマチェイ・コペツキー(1775-1847)が創出したとする説が広く流布しており、今回の展覧会カタログにも当初そのように記述した。しかし、引き続き資料を読み進めるとそれとは異なる説が有力と思われるので、この機に乗じて「訂正」をしようと筆をとった次第である。

その説は、このキャラクターがコペツキーという個人によって創出されたものではなく、他国からチェコにもたらされた「原型」がカシュパーレックに変じたというものだ。周辺国からボヘミア(現在のチェコ共和国の西部から中部にかけての地域)にやってきた人形遣いを通じて、チェコの人形芝居に持ち込まれた〈ピンブルレ(Pimprle)〉という喜劇性の高いキャラクターがその原型だとされている(※1)。

このピンブルレは多くの芝居に登場し、庶民と同じ目線一例えば貴族の言動を風刺する賢い召使いなどを演じて民衆から支持され、大いに人気を得た。19世紀の初めにはパペットシアターと同義語で〈ピンブルレ・シアター〉という名称も使われており、パペットそのものを指すまでになっていたようである。1840年代初頭にはピンブルレが次第にカシュパーレックとして知られるようになったという記述はあるのだが、その具体的な経緯については触れられていない(※2)。さらに、1780年代から19世紀初頭にかけて役者ヨーハン・ラロッシュ(1745-1806)が演じる〈カスペル(Kasper)〉という道化が登場する芝居が、ハプスブルグ帝国の首都ウィーンで全盛を極めたという事実もあり、個人的にはこちらとも何らかの関連があると睨

んでいるが、あくまで推測どまりである。もしこの分野に詳しい方あるいはそれに関する記述があれば是非ともご教示願いたい。何にせよカシュパーレックの起源についてはマチェイ・コベツキーという個人が創出したとは断定できないので、本展のカタログ正誤表にその旨を訂正した。

起源の話はさておき、愛らしい少年像と成人男性像のどちらが本来のカシュパーレックかという点、これは制作年代が示すとおり背丈の小さな成人男性の方である。カシュパーレックの性格が、勇気と臆病、犠牲的行為に対して怠惰と貪欲といった相反する要素の間で常に揺れ動くように、その外見も子供のような体躯で大人の容姿を兼ね備えた姿で表されている。彼が演じる役柄は、恐らくほとんどが本来の〈ピンブルレ〉から引き継がれたものであり、自らの機知を武器にして権力者を出し抜きながら無邪気さを失わず人生を謳歌する庶民の代表的存在であった。私自身あまり演劇には詳しくないのだが、このカシュパーレックの役柄から想起するのが日本の狂言における「太郎冠者」である。

歌舞劇の能に対して狂言は滑稽・笑いを主題にした科白劇であり、そのなかで太郎冠者は主人に対して従者を指す名称として用いられている。忠実かつ才気に恵まれた従者である反面、怠惰で酒と悪戯が好きなお調子者であり時には思わぬ災難を招くこともあるが、概して無邪気で愛嬌がある。演じるのが人間と人形の違いはあるものの、まさにカシュパーレックの役割と重なる。権力者を風刺し支配される側に肩入れした演目が数多く書かれた背景には、権力者に支配される側の閉塞感とそれを打破したいと願う民衆の願望があった筈である。時局に応じて勤勉にも怠惰にも変わるの、自らの運命を支配者にゆだねることしかできない庶民の実際のかつさやかな処世術であったに違いない。カシュパーレック発祥の謎が茫洋としたままなのは、そのような背景にも一因があるのだろうか。

話を再びカシュパーレックに戻すと、20世紀の初めチェコでは子供を対象にしたアマチュア劇団の活動が活発になるのだが、その頃からカシュパーレックに変化がおきる(※5)。従来のカシュパーレックが持っていた臆病や怠惰といった〈人間が抱える負の部分〉が次第に消失し、無邪気で明るい面が強調される内容に変わったことが一つ。また、新たな観客となった子供たちが自己を投影しやすいようにカシュパーレックの容貌も利発そうな子供に変じたのである。本展に出品している家庭用人形劇のための操り人形の中にも、子供のような顔をしたカシュパーレックの姿を何体か見つけることができるだろう。

こうしてカシュパーレックについて知識が深まってくると、やはり実際にカシュパーレックが登場する作品を見たくなる。今現在日本で入手できる作品は残念ながら実際の人形劇ではなくチェコの画家ヨゼフ・パレチェクが美術を担当したテレビ向けのアニメシリーズ(1973-74年)『カシュパーレックとホンザ』位だろうか。このシリーズの中から数編を含むパレチェクの作品が現在DVD化されて販売されている。ホンザもまたカシュパーレックと並びチェコ人にとってなじみ深いキャラクターで、昔話にしばしば登場する勇敢な少年

である。こちらにも本展出品作の中に登場しているのでは是非探してみたい。

時代を経るなかで今やすっかり毒気を抜かれ「愛されキャラ」となったカシュパーレックだが、その本来の魅力はそぎ落とされてしまった強烈な個性にこそ宿っていたと個人的には思うのである。

[]

※1 Alice Dubská, Jan Novák, Nina Malíková, Marie Zdenková, "Pimple and Kašpárek-Comik Heroes of Czech Puppetry" in Barbara Day et al. eds., "CZECH PUPPET THEATRE YESTERDAY AND TODAY (Prague: Theatre Institute in Prague, 2006) p.9

※2 前掲書に同じ

※3 カスベルレまたはカスパーとも呼ばれる

※4 原研二『十八世紀ウィーンの民衆劇 放浪のプルチネッラたち』法政大学出版会 1988年 p.393-394

※5 前掲書1に同じ

関連企画

■ 講演会

「人形劇と絵本・アニメーション—国民的キャラクター・フルヴィーネクなど」

11月21日(日) 14:00より/11階講堂にて

講師: 柴田勢津子(BIB2009審査員)

聴講無料/先着150名

■ 出品作家によるワークショップ

自分を動物にたとえてキャラクターをつくり、木版画にします。

講師: 山口マオ(イラストレーター)

11月6日(土) 13:30~16:30 / 11階講堂にて

中学生以上20名/要事前申込み/材料費500円

[申込方法] 往復はがき(住所・氏名・電話番号・年齢・性別を明記)にて、〒260-8733千葉市中央区中央3-10-8 千葉市美術館「プラティスラヴァ・ワークショップ係」まで(10月26日(火)必着)。申込多数の場合は抽選。

■ 系操り人形のデモンストレーション

10月17日(日)、30日(土)、11月14日(日)、27日(土)

各日2回開催 14:00~14:30・15:00~15:30

荒川純子(人形劇団ブーク)

展示室内にて/申込み不要 ※観覧券が必要です。

■ 人形劇の上演

「えんどう豆の上にねたお姫さま」(原作:アンデルセン)

10月10日(日)、11月21日(日)

各日2回開催 13:00~13:20・15:00~15:20

人形劇団MあんどB

展示室内にて/申込み不要 ※観覧券が必要です。

■ チェコの人形劇映像上映

「三銃士」(上映時間54分)

「不思議なカップ」(上映時間42分)

※会期中展示室内にてループ上映

■ ギャラリートーク

担当学芸員による: 10月6日(水)、11月4日(木)14:00より

ボランティアスタッフによる: 10月6日以外の会期中毎週水曜日14:00より

プラティスラヴァ世界絵本原画展とチェコの人形劇

2010年10月5日(火)▷12月5日(日)

10:00—18:00 (毎週金・土曜日は20:00まで)

*入場受付は閉館の30分前まで

[休館日] 11月1日(月)

[観覧料] 一般 800(640)円, 大学・高校生 560(450)円

小・中学生および障害者手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料

*()内は前売、団体30名様以上、および市内在住60歳以上の料金

*前売券は、千葉市美術館ミュージアムショップ(9月26日まで)、ローソンチケット(Lコード: 39755)、千葉都市モノレール「千葉みなと駅」「千葉駅」「都賀駅」「千城台駅」の窓口(12月5日まで)にて販売。

*10月18日(月)は「市民の日」につき無料解放

「わくわくする学校」を考える

千葉大学や地域との連携によるアウトリーチ事業「千葉アートネットワーク・プロジェクト(WiCAN)」が活動を始めて8年目。美術館の15年の歩みの、じつに半分以上を占めることになります。その間、日本のあらゆる地域において多種多様なアートプロジェクトが行われるようになりました。そろそろWiCANも、その役割と取り組むべき課題を考え直す時期といえるでしょう。地域の課題を見極める一方で、プロジェクトの担い手の特徴や関心はどこにあるのか。WiCANの母体となる学生たちの中でも、中心的役割を果たすのは、教育学部芸術学研究室の院生たちであり、彼らは幅広い捉え方をすれば「美術教育」を研究テーマに定めているといえます。ここに、千葉市でも例外無く課題となっている余裕教室活用の問題をからめて、WiCAN2010は動き始めることになりました。

千葉では子どもの総数の急激な減少は見られないものの、地域ごとの人口分布の変化により、既存の学校の統廃合と人口急増地域での教室不足が同時に起こっています。その中で、余裕教室の問題もなかなか満足のいく解決方法が見いだせない状況といえましょう。国の調査結果によれば、国内各地域が抱えるこれらの余裕教室のほとんどが、何らかのかたちで活用されていますが、その多くはシンプルなる「第二教室」等への転用と考えられます。習熟度別などきめ細やかな配慮に基づく少人数授業の実現が望まれ、また、膨大な業務に追われる教職員にとって、気持ちはあってもそれ以上の取り組みは難しいのが現実といえるでしょう。まだまだ可能性を秘めた余裕教室をもっとわくわくする教室にしたい。WiCAN2010は学校の外側から、アートプロジェクトとしての視点をもって、この課題に取り組みたいと思います。

本来、学校には教育の場としての役割だけでなく、学校を中心として育まれるコミュニティや地域文化があります。廃校を地域の文化拠点として再生させようという試みは、首都圏の良く知られた例を挙げるだけでも、最近話題となっている廃校となった中学校をギャラリーや現代アート関連のオフィスなどに使えるようにした秋葉原の「アーツ千代田3331」をはじめ、いくつもの興味深い取り組みがあります。

廃校の校舎と余裕教室の決定的な違いは、子どものいる日常がその



基本にあるか否かではないでしょうか。本プロジェクトでは、活用対象とする空き教室を特定していません。建築プランの設計には具体的な条件の提示が望ましく、舞台を特定しないのであれば、調査を進めて、想定される空間の割り出しをししない限り、実現不可能な案に終わりかねません。とはいえ、一部の実験的な校舎を除き、箱としての教室はある程度類型化が可能といえます。また、教室そのものの大掛かりな改修は様々な面から容易ではありません。本格的な工事を必要とせず、ある程度融通がきく、自由度の高い仕掛けとは、どのようなものが考えられるでしょうか。

WiCAN2010では、建築家の曾我部昌史さん(建築事務所「みかんぐみ」主宰)を迎え、学校現場の先生方、将来学校教育に関わろうという意欲的な学生たち、地域の方々とともに、「わくわくする学校」について話し合い、アイデアを目に見えるかたちにしていきたいと考えています。そして、11月には、美術館1階のプロジェクトルームを余裕教室に見立ててアイデアを発表し、足を運んでくださる皆さんとともに、さらなる検討をすすめて行く予定です。

◎プロジェクトでは現在、「わくわくする学校」をともに考えアイデアをかたちにしていくメンバーを募集しています。プロジェクトへの参加の仕方や今後の予定については、専用ウェブサイトをご覧ください。

<http://chibaartnet.wordpress.com/>

メーリングリストへの登録は、mail@wican.orgまで。

「もう一度見たい思い出の展覧会」結果発表!

9月26日から1階情報スペースにて千葉市美術館開館15周年記念関連展示「千葉市美術館のあゆみ」を開催いたしました。展示にあたって、皆様から「もう一度見たい思い出の展覧会」を募集し、たくさんのご応募を頂きました。ありがとうございました。その中から票数の多かった10本の展覧会をご紹介します。

| | |
|---------------------------------|--------------------|
| 瀧澤久子コレクション 祈りをつづる染と織 タイの美しい布 | 東山魁夷 |
| 生誕二百年記念 歌川国芳展 | 房総の神と仏 |
| キンゼイコレクション 現代根付 | 竹久夢二展 -描くことが生きること- |
| 伝説の浮世絵開祖 岩佐又兵衛 | 長澤蘆雪展 -没後200年記念- |
| 藍と暮らす人々 トン族・ミャオ族・タイ族 太陽と精霊の布 | 伊藤若冲 アナザーワールド |

これからの千葉市美術館もご期待ください。

◎市民美術講座のお知らせ

「市民美術講座」は、市民のみなさまに千葉市美術館のコレクションを紹介し、作品についての理解を深めていただくものとして、2004年度より実施しております。

今年度下期は右記の内容で行います。聴講は無料ですのでお気軽にご参加下さい。

【時 間】 14：00より(開場は30分前)

【場 所】 11階講堂

【定 員】 先着150名(入場無料)

- 第6回 10月23日(土) 「タイガー一立石とポップ・アート」
【講師】 水沼啓和(当館学芸員)
- 第7回 11月20日(土) 「ブラティスラヴァ世界絵本原画展
(BIB)と日本人作家たち」
【講師】 山根佳奈(当館学芸員)
- 第8回 12月18日(土) 「神坂雪佳と19世紀末の凶案家たち」
【講師】 西山純子(当館学芸員)
- 第9回 1月15日(土) 「鳥居清長と錦絵の黄金時代」
【講師】 田辺昌子(当館学芸課長代理)
- 第10回 2月19日(土) 「喜多川歌麿と錦絵の黄金時代」
【講師】 田辺昌子(当館学芸課長代理)

ボランティア日和 episode25

「美術館」との出会いは、時代と環境もあったかもしれませんが、私の場合は遅く、大学生になってからでした。静かな、時間が止まったような会場で過ごすひとときに、まさに「大人の世界」を感じたものでした。今、千葉市美術館のボランティアになって、一つの展覧会が開催されるまでの時間と膨大な作業等の経緯をかいま見て、感嘆するばかりです。そして、思うことはやっぱりただ一つ。たくさんの方に見ていただきたいということです。

美術館ボランティアの仲間は、博学の方が多く経験豊かで、やさしい方ばかりです。とても前向きで、みなさんからのアイデアも具体化されています。その中で、私に何ができるだろうと考えたとき、まず最初に浮かんだのが、ワークショップのお手伝いでした。子どもが小さい頃、動物園や遊園地以外に一緒に楽しめる所を求め、科学館や博物館のワークショップに連れていきました。ワークショップが楽しくて、館内はついでに見たようなものでした。でもそれが、2度、3度と足を運ぶことにつながり、子どもにとって、親しみのある場所になりました。

千葉市美術館でも、ワークショップが企画されてきました。展示中の作品やコレクションに親しんでいただくために、本に関連した展覧会のときは、和綴じの本作りや版画を摺って蔵書票を作ったり、「八犬伝の世界」ではストラップ作りといろいろありますが、前回の

「MASKS—仮の面」展では、紙粘土でお面を作ったり、プラ板で立体的なお面のストラップを作ったりしました。

親子で、あるいは中高年のご婦人がお友達と、また、おじいちゃん、おばあちゃんからお孫さんまで親子3代で参加されたご家族もありました。市の広報を見て申し込み、この日を楽しみにしていたという方もあり、うれしい限りです。

美術館は、博物館や科学館とは違い、学校の遠足や家族で出かけるというのは少ない場所のように思います。現在、年間20校が参加する「小中学生鑑賞教育推進事業」というのがありますが、我が子もその経験はできませんでした。大人になってから行く美術館もいいものですが、もっと年若い頃にその経験をしてもらい、その年代にしか感じとれないものを味わってほしいと思います。そのためにも美術館が「行ってみたいくなる所」になることを願います。そして、ワークショップがそのきっかけになればと思います。

何かおもしろいことないかなと思っている子どもたちが、「今度何やるのかな?」とアンテナをピンとはって、千葉市美術館のワークショップを探してくれるようになったらと願います。そして、私自身ボランティアとして、これから何がやれるか、まずは勉強しながら考えていきたいと思います。

【美術館ボランティア 古賀悦子】



【交通案内】

- ◎JR千葉駅東口より
- 徒歩約15分
- 千葉都市モノレール県庁前方面行「霞川公園駅」下車徒歩5分
- バスのりば7番より大学病院行、または南矢作行にて「中央3丁目」下車徒歩3分
- ◎京成千葉中央駅東口より徒歩約10分
- ◎東京方面から車では、京葉道路または東関東自動車道で宮野木ジャンクションから木更津方面へ、貝塚IC下車、国道51号を千葉市街方面へ約3km、広小路交差点近く
- ◎地下に駐車場があります

【編集・発行】

千葉市美術館
〒260-8733 千葉市中央区中央3-10-8
TEL. 043-221-2311 FAX. 043-221-2316
Chiba City Museum of Art
3-10-8 Chuo, Chuo-ku, Chiba 260-8733, Japan
【発行日】 2010年10月5日
【印刷】 半七写真印刷工業株式会社

 **千葉市美術館**
Chiba City Museum of Art

<http://www.ccma-net.jp>

